

当会の前会長であり前近畿大学医学部附属病院中央臨床検査部技師長の秋山利行先生が、平成 18 年 4 月 2 1 日開催の学術講演会においてお話をいただきました内容を寄稿して下さいました。

内容は、『我が道を省みる』と題して秋山先生の臨床検査技師人生 4 3 年間を顧みると共に、そこで培われた組織における長としての心得、今後当会を背負っていく後輩へのエールが綴られています。非常に素晴らしい内容であり、秋山先生の臨床検査技師としてのルーツを垣間見ることができたように思います。

当日講演会に参加できなかった会員の皆様はもとより当日出席の皆様にも、もう一度あの講演会の感動を呼び覚まして頂くために読んでいただけたらと思います。

はじめに

「道」= “みち”、“どう”には往来するための所。目的地に至る途中。みちのり。人が考えたり行ったり、また人として守るべき条理・道理。儒教・仏教などの特定の教義。道理を弁えること・分別。手段・手法（治療のみちがない）。方面（そのみちの達人）。言う・語ること（報道、言語道断）。

そして精神的、肉体的練磨により成される専門的学問・技・芸（柔道・相撲道・剣道、工芸・陶芸、茶道・書道...）等と広く深い意味があります。

「省みる」= “かえりみる”、“はぶく”、“しょう”、“せい”には目をとめてよく見る。反省する。はぶく。安否を問う、見舞う。情けをかける、世話をする。官庁の意（転じて中央行政機関の厚労省、文科省・・・）意味がありません。（広辞苑）

平成 18 年度私立医科大学病院臨床検査技師会総会（H18.4.21）の第 2 部講演会のテーマは、臨床検査技師として昭和 38 年（1963）から平成 18 年 2006）3 月の定年退職に至る 43 年間、病院内臨床検査をひたすら歩み続けた経験をもとに、“我がみち（どう）をかえりみて（はんせい）”、良きもの、貴きものは今後の己の人生に、あるいは後進の教育に活用し、そうでないものははぶいてゆく意味合いを込めて付けました。

.国立病院時代

昭和 38 年（ 63）3 月末、北里衛生科学専門学校を卒業した関東（箱根）出身の私は、僅かな書籍をバッグに入れて関西大阪の地に足を踏み入れました。国立刀根山病院を振り出しに国立大阪病院、国立泉北病院（何れも当時の名称）など、国立病院には約 11 年間お世話になりました。その間、良き先輩、先生方にご教示を戴き、特に国立大阪病院では林長蔵先生に有機・無機化学の基礎と化学的に考える習慣を学び、川井一男先生には病理・細胞診断学を学んで細胞検査士（日本・国際）の資格認定（ 70）を取得しました。

その後、消化器内科益澤 学先生との共同研究で「Touch Smear Cytology for Endoscopic Diagnosis of Gastric Carcinoma」を The American Journal of Gastroenterology に投稿しました（1977.5 発刊）。

国立病院で学んだ細胞を見る・細胞と対話することの楽しさが、何時しか私の主なライフワークとなりました。

近畿大学病院開設時～人生の転機、そして中検管理業務へ

昭和49年（74）7月、近畿大学・近畿大学医学部附属病院開設準備室からお声がかかり、翌50年（75）5月の開院にあわせて臨床検査関係全般におよぶ諸準備に従事しました。以後、当附属病院中央臨床検査部の立上げから本稼働へ、また、後進の実践的教育指導、検査学的検討、および臨床医との共同研究等を踏まえ、院内・外共に大学病院臨床検査部としてのレベル・質的向上に努めてきました。そして平成5年（93）4月からは技師長としての中検・病院的管理業務を主に、また臨床検査技師として骨髓像検査を日常業務とし、本平成18年3月末までの約32年間、国立病院を含め通算43年間、臨床検査の道を歩んできました。

私の43年間の臨床検査人生は昭和60年（85）頃を境に前後されます。前半は臨床検査関連の学術書籍を主に学術・技術的習得が大半を占め、それ以外の社会的、道徳的・人間学的教養を高める類の読書はあまりしていません。

臨床検査という分野の中だけで生き、それが生きる術の最高と考え、己のみの世界であったように思われます。

しかし、後半になって年毎に人の上に立ち、臨床検査技師以外の多くの方々と話し合う機会が増えてきた時、己の社会的一般教養の低さ、話題の少なさ、対話・会話の下手さ、そして徳性の無さを覚えました。

それは恥ずべきことと自省し、さらなる人間的・人格的成長をするには如何なる術があるかを探し求めました。45、46歳の時です。

その術は、精神的修養は古典・古教等に学び、肉体的鍛錬は走ることで脆弱な自身を鍛えようとプレッシャーをかけ、実践の中で何かを掴みたいと考えました。平成5年以降、中検・病院的管理業務を行うに当たり、診療側や事務部門との関係は比較的良好に保たれていたと自負しています。それを紐解くと、診療側には昭和55年頃から医学生、研修医、常勤医師が血液・骨髓像の鏡検実習に来られた時、また病棟、外来診療科における骨髓穿刺液塗抹標本作成に際して、医師、看護師には常に敬意をもって接し、対話し、意見交換し続けたことが経年的に進展し、いつしか厚い信頼関係を築いて来た、と思います。

一方、事務部門（5課）とは毎朝書類関係の提出時における目礼が、一言の挨拶や小事の会話が、そして何かにつけて相談に乗る等の積重ねが中検部・技師長との信頼関係を築く基になり、展開して行ったと思われます。

古教にある“敬意と尽心”、“小事が大事を成す”の積重ねです。

.良書に出会う・身体を鍛える 自己改革

昭和 60 年、最初に眼にした書物は伊藤 肇著「人間的魅力の研究」と「人間学」です。頁の至る所、安岡正篤（やすおかまさひろ）という人物・人物像が諸所に載っていました。これが引き金となり、翌 61 年、安岡正篤先生の書物に出会いました。以来、私は先生の著書（多くは先生の講演集）の虜になり、貪るように読み耽る日々が 4 年程続きました。書物の多くは人間学講座が主であり、私が常に探し求めてきたのはこれだったのです。

「論語の活学、干支の活学、知名と立命、運命を開く、運命を創る、修身の学、身心の学、人物を創る、人間学のすすめ、活眼・活学、漢詩読本、三国志人間学、十八史略、陽明学 10 講・・・」など、枚挙に遑がありません。

今も書棚には約 30 冊が一隅を照らし、煌いているかの様になります。書物から教えられ、習得した数知れない古典・古教、歴史と文化、見識、智慧、生き方、元気・パワー等々。そして万分の 1 でも良いから先生の如き人物像に近づきたい、そのような憧れが私の全てになり、尊敬する人となり、人生の師と仰ぐに至りました。

先生の著書には心を揺さぶり、感動・激させ、元気が出、勇気が湧き、読んだ後の充実感といった何か熱いものが伝わってきます。情熱が伝わってくるのです。また、この時期、月刊誌「致知」も私自身の内面的成長をさらに高めてくれました。特に財界をはじめ、企業、スポーツ関係など、あらゆる分野で人を治める立場の方々、トップリーダーの生き方、後進の指導育成に関する内容が対談形式で紹介されたものが多く、自分なりに消化して日常業務に採り入れたものが幾つかあります。

「偉大な人物（書物）に私淑し、その理想像に向かって絶えず努力し、到達すべく努力することで運命は決せられる」 - ウイリアムジェームス -

一方、肉体的鍛錬の基礎は走ることにあり、そして日曜百姓で汗を出すことを展開してゆこうと決めました。46 歳時、はじめて市民マラソン大会に参加しました。日本陸連が公認する淀川河川敷の 5 km コースです。僅か 5 km でしたが、長い路でした。足腰の疲れはあるものの、これまでにない爽快さを味わいました。その後、10 km、10 マイル（16 km）、ハーフ（42.195 km/2）とエスカレートし、フルマラソンに挑みました。

- 私を支えた雑学 -

平成 5 年 3 月、技師長（代行）を拝命する 1 ヶ月前、奈良明日香村における「明日香古代マラソン 42.195 km」への挑戦です。53 歳を迎える約 2 ヶ月前でした。内心では、また、何人かの役職者には、途中でリタイヤ、あるいは車に収容されるようであれば、4 月 1 日の辞令は受けないと誓いました。それは自身への誓い・約束を履行出来ぬ者が、技師長としての責任職をまっとう出来る訳が無いと考えたからです。

それにしても 42.195 km は途方もなく遠く、35~39km は空腹と苦痛に対する我慢、耐える、気力を保ち続けることの連続で、早くこの苦痛から逃れたい一心でした。ゴールタイムは4時間16分7秒でした。

以後、59歳時までに毎年1回は参加し、計8回(年2回が一度)参加しました。ベストタイムは関西国際空港オープン前の阪神高速道路湾岸線を走った時の3時間53分です。他は概ね4時間5~10分で全て完走しています。

精神的、肉体的許容限界は各人により違います。しかし、己の限界に挑み、苦痛に耐え続けてそれを達成した時、そこには素晴らしい爽快さを覚える一方、何事にもヘコタレない、怖きものが無くなり、如何なる困難・状況に陥っても這い上がって生きて行ける自信が培われました。

また、日曜百姓は平成3年頃から始めました。百姓は plan,do,do・check,hervest で、計画性、時機・旬、観察力、対応力に欠けると良好な結果は得られません。真剣さに欠ける方は観察力や工夫がなく、概ねいい加減なものばかりです。旬に適した種を蒔き、苗を定植して生育を見守るなか、葉っぱや軸を観ては夫々野菜が欲しているミネラル・肥料は何かを感受する眼を己が育むことが大切なことであると解せました。

これは日常管理業務の中で人材を育成することと相通じます。管理監督的立場にいる者が、まず己を修めていなければ、人が成長し、求めているものが何かを観る眼、察する眼は養われません。

また、組織が必要とする“じんざい”は人財>人材>人在であるべきで、如何に多くの者をこの範疇に育成するかが大切です。しかし、何れの組織にも人済や人罪は少数からずいるものですが、人間教育の面から見直してゆかねばなりません。

- 己を修め、而して人を治める - (大学抄) は上に立つ人の心得です。

.経験を積み、それを活かして智慧と成す

昭和60年(85)以降、私の主な精神的修養は安岡正篤先生の人間学講座を幹とする数々の書物にあります。そして城山三郎、山崎豊子、土門冬二、および鈴村進著の主人公の生き様に学び、また、小島直記、中條高德、西岡常一著における自らの生き方に触れ、それらの感激、感動を自分の生きる道の肥やしとしました。

一方、肉体的鍛錬はマラソンや日曜百姓等で磨くと共に、自然と向き合いました。勿論、精神的修養、肉体的鍛錬は画一的なものではありません、同心・体のものです。これらから得た知識や智慧を私の日常管理業務の中で活かし、技師長として、中央臨床検査部のリーダーとしての心得としました。以下にそれらを掲げます。

長の心得

- 1) 臨床検査技師としての専門性を有し、技師長として己を修養・練磨しなければ人は治められず、部下からの信頼性は得られない。 - 己を修め而して人を治める -
- 2) 学問・技術的な向上に伴い、古教・先賢人に人間学を学び、社会的人間性を豊かにして徳性を養う。 - 徳が主であり、才は従である -
- 3) 品性、品位の基本は興譲・謙虚、感謝、素直さにある。 - 虚を以って心を養い、徳を以って身を養う -
- 4) 私利私欲を絶ち、独断専行を絶ち、固くなさを絶ち、我を張らず。 - 4つを絶つ -
- 5) 知識を基に経験を積重ねてゆけば智慧となり、応用力となり、貴い洞察力となる。

長の心得

- 1) 決断は知識でするものではない、胆識である。
- 2) 職位を端にかけてものを言わない。 - 己の実力が失せると職位でものを言う -
- 3) 明るく、元気でプラス思考でなければならない。 - 明るくなければ人は寄らない -
- 4) 知識の幅を広げる。 - 話題のチャンネルを多く持てば会話が進展する -
- 5) 思考の3原則を身につける。 - 長い目で見ると、多面的にみる、根幹的にみる -

長の心得

- 1) 才徳兼備を選ぶ。兼備がない場合は才の人より徳の人を選ぶ。
- 2) 功労者には賞を与えよ、直に地位を与えてはいけない。(松下幸之助)
- 3) 地位に相応しい見識がなければ地位を与えない。
- 4) 地位を欲する者に応えてはいけない。(王安石の新法)

5) 己への苦言者を避けてはいけない。

長、リーダーに望む諸条件

1. 長の条件

言行一致である

約束を守る

思慕される

部下のために己を犠牲に出来る。

2. リーダーの条件

実行力がある

決断力を有する

リーダーシップがとれる

人間的魅力を有する

夢がある

人を大切にする心を有する

これらは単なる言葉遊び、美辞麗句の羅列ではありません。知識の集積でもありません。古教・典に学び、体験の中から育んだものです。体験により得た智慧であり、見識です。